

新島旭先生を悼む

前新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学講座（医学部第二生理学）教員、
蔵王めぐみ幼稚園園長・新潟医療福祉大学非常勤講師

山口 賢一

昨年10月22日、新潟大学名誉教授新島旭先生が逝去された。享年94歳だった。学生時代から50年近く、公私に及ぶ薫陶を受けた者として、先生のお人柄と学風を一筆したい。

先生は大正10（1921）年5月20日、東京で誕生された。昭和17（1942）年新潟医大に進学、昭和21年に卒業され、医師免許を取得後、半側発汗を発見した高木健太郎教授（後 名古屋市大学長・参議院議員）の主催する生理学教室に入局した。この頃副手として、東京医学歯学専門学校や徳川研究所等で神経生理学の研鑽を積まれている。学位取得後（昭和25年）帰郷し、滝野川病院（東京都北区）や実家（北区十條）で耳鼻科医を務めた。しかし、高木教授の後任、内園耕二教授（後生理学研究所長）の招聘により、基礎研究復帰と新潟移住を決意し、昭和32年8月、第一生理学講座助教授に赴任された。高木・内園両教授の存在なくして、生理学者新島旭の誕生を語ることは出来ない。二人は、先生の温厚謙遜な人柄と学問への誠実を見抜き、能力を確信して道を敷かれたのである。内園教授の東大転出を機に、昭和37年先生は第一生理学講座教授に昇格された。そして、類い希な生理学者の真価を遺憾なく発揮された。先生は自律神経求心性・遠心性活動を弁別記録する手法を駆使し、副腎・肝・脾・腎・心臓等の臓器に血圧、グルコース、浸透圧、熱、機械刺激等を感じずるしくみがあること、それらの情報は、遠心性出力その他の因子を変えてホメオスタシスに資すること等を次々に発見された。私は肝臓の浸透圧感受性を示した先生の Science 誌の論文（1969）に刺激され、浸透圧受容器を巡る問題



を生涯追究することとなった。

先生の旺盛な研究の源には、飽くなき探究心、恵まれた人的交流、堪能な語学力があった。先生は英仏語に秀で、欧米諸国で共同研究に励むと共に、国内外から幾多の研究者を招いて、交流の意義を示された。私には取分け、ニューヨーク州立大 C.M. Brooks, K. Koizumi 教授との佐渡旅行、山下博教授（産業医大）の瀬波での研究班会議、大村裕教授（九大）や佐藤昭夫部長（東京都老人研）率いる研究グループとの交流が今尚鮮明である。

先生は定年退官（昭和62年）後も、多くの誘いを断り、新潟市で研究を継続された。葉子夫人の献身的協力の下、自宅に研究室を作り、現役時代と同様の実験を進められた。大学の雑務を免れた

分、一層研究の自由を享受された。先生はここで、教授在任期間に匹敵する歳月を、阪大（永井克也教授グループ）や企業との共同研究に費やされた。自律神経活動を、交感神経副腎枝、褐色・白色脂肪枝、脾臓枝、腎臓枝、肝臓枝、迷走神経胃枝・腹腔枝等から記録し、光、匂い、音楽、神経ペプチド、漢方薬など、人の暮らしに関わる身近なものが自律神経を介し、血糖、血圧、脂肪分解、産熱（体温）、食欲、免疫系を制御すること等が解明された。定年から卒寿迄に発表された英語論文は約90報、邦文図書・論文は70報にのぼる。第55回大会（新潟市、1978年）を主催され、研究発表の第一の場とされた日本生理学会大会には、第87回大会（盛岡市、2010年）迄、例年参加発表され

た。

「継続は力なり」、これは先生が、科学技術の急速に進展する時代、神経活動の電氣的記録という一つの技法を70年も継続し、真実であることを世に伝えた遺訓である。先生はさらに病床で、「研究は科学的興味・好奇心を第一にして進めるべきであり、金銭的価値に幻惑されないこと、そして自然や動物に教えを乞う謙虚な気持ちで取り組みなさい」と語られた。先生は、サムエル・ウルマンの詩にあるように、「驚異にひかれる心、幼子のような未知への探究心、人生への興味の歓喜」を瑞々しく保ちつつ、94年のご生涯を青春のまま閉じられた。ここに満腔の感謝をこめて先生のご冥福をお祈りしたい。